

## 病虫害発生予察特殊報 第1号

害 虫 名 : ネギハモグリバエ (別系統)  
学 名 : *Liriomyza chinensis* Kato  
作 物 名 : ねぎ

### 1 発生確認経過と国内での発生状況

平成30年8月頃、中信地域のねぎほ場において、葉が白く枯れこむ症状がみられ、従来のネギハモグリバエによるものとは異なる著しい被害が発生した。

令和元年6～8月に中南信地域で野菜花き試験場が採取した個体を、(国研)食品産業技術総合研究機構東北農業研究センターに塩基配列による解析を依頼した結果、9月20日に従来の塩基配列(以下、A系統と記述)とは異なる別系統のネギハモグリバエ(以下、B系統と記述)であることが判明した。

国内におけるB系統の発生は、平成28年頃から京都府で、平成29年頃から茨城県と富山県で被害が確認されており、平成31年3月に京都府、同年(令和元年)5月に茨城県及び富山県、9月に千葉県からそれぞれ特殊報が発表されている。

### 2 形態

雌成虫の体長は2mm前後であり、体色は淡黄色で背面と小楯板は光沢のない黒色を呈する(図1)。ネギハモグリバエB系統は従来のA系統と形態的な差異はなく、目視による識別は困難である。

### 3 生態と被害

- (1) 両系統とも幼虫は葉肉内に潜り込んで食害するが、B系統はA系統と比較し、1葉あたりの寄生頭数が多い傾向にあり、被害も甚大となる。B系統による被害が進むと、隣接した食害痕が複数癒合し、葉が白化することがある(図2、3)。
- (2) 上記以外の生態的な差異はまだ解明されていない。以下はこれまでA系統において解明されている生態である。
- (3) 発育零点は約11℃。県内では年4～5世代発生(25℃で約20日/世代)する。たまねぎ、ねぎ等のユリ科ネギ属のみを食害する。
- (4) 雌成虫は、葉に点々と小さな穴をあけ、汁液を摂食し、摂食痕に産卵することが多い(図4)。幼虫は葉肉内を食害しながら進み、不規則な線状の食害痕を残す。
- (5) 幼虫は成長すると葉から脱出し、地表や土中で蛹化し、蛹(又は幼虫)で越冬する。

### 4 防除対策

- (1) 従来のA系統による被害は比較的小さく、ねぎの生育や生産物に大きく影響しなかったが、B系統によって生育初期に加害されると葉の奇形や生育遅延を生じる。このため、早期発見に努め、発生初期から防除を実施することが重要となる。
- (2) 県防除基準を参考に、ネギハモグリバエ又はハモグリバエ類に登録のある農薬を散布する。ただし、ネギアザミウマも併発している場合には、農薬を選択する際に考慮する。

- (3) 定植時や土寄せ時における、登録農薬のかん注処理、粒剤散布も有効である。
- (4) 被害葉や残渣は本種の発生源となるため、圃場内に放置せず1カ所にまとめて積み上げ、ビニール等で被覆して裾部分は土中に埋める等適正に処理する。



図1 雌成虫



図2 A系統の食害痕



図3 B系統の食害痕



図4 摂食痕

長野県病害虫防除所 中南信担当  
TEL : 0263-53-5642 (直通)  
FAX : 0263-54-4508  
E-mail : bojo-y@pref.nagano.lg.jp